

【タイトル】	飛びこないのナナミ			
【氏名】	前川 尚哉	フリガナ	マエカワ ナオヤ	
【ペンネーム】※あれば	満腹亭いなり	フリガナ	マンブクテイイナリ	
【性別】	男	【年齢】	34	歳
【住所】	〒201-0002			
【電話番号】	09051247255	※日中連絡可能な番号をご記入ください		
【メールアドレス】	starwars3622	@yahoo.co.jp		
【本編の総ページ数】	60	※タイトル/あらすじ/登場人物表/参考文献の各ページ除く		
【略歴】	<ul style="list-style-type: none"> • 京都造形大学芸術学部映画学科映画監督コースを卒業 • 上京しお笑いライブやネット番組やラジオの構成作家を経験 • 現在は会社員をしながら趣味でシナリオ執筆 			
【過去の執筆経歴】	<ul style="list-style-type: none"> • 『仇討ち』（京都造形芸術大学三回生時ゼミ制作作品。監督兼任） • 『傀儡』（京都造形芸術大学四回生時卒業制作作品） • 『不思議な夜』（日テレシナリオライターコンテスト 2024 一次審査通過） • 『雨障』（第 25 回テレビ朝日新人シナリオ大賞 一次審査通過中） 			

【あらすじ】

願者・一ノ瀬ナミは飛び降りる寸前に自殺志
失っている男性を発見し助けて自殺し損なっ
ても分らない。町医者から命を助けてしま
った責任があると言われ男性を助けながらも
う少し生きてみることになるナミ。
で死んでも二度と行かなかったはずの会社
宅すると男性が料理を作ってくれていたその
暖かさに涙が出るナミ。ナミは男性に自
分が何故自殺をすることになったのかを語る。
ナミは会社で居場所が無く男性にも裏切ら
れ友人も失い両親を亡くしていた。記憶喪失
だからその純粋な男性の反応に救われたナ
ミは男性にハチオと名を付ける。
次の日にナミは会社で大暴れしクビにな
る。帰りに道で寄った携帯ショップで小学校時
代の友人の由衣と再会する。由衣は娘がいる
が旦那を昨年病で亡くし親子共々死も考えた
が頑張っ生きているのだという。由衣の話
を聞いたナミは自分の情けなさ生きるこ
とに希望を持つことへの恐怖から改めて死の
決意を固める。ハチオはナミが死ぬなら自
分も死ぬと言いつつハチオはナミが死ぬなら死
ぬまでにしたいことをしようとして提案し様々
なことを実行に移す。
レ・谷内誠の夫婦に出くわしてしまい、ハチ
オがナミを侮辱する誠を暴行してしまう。ハチ
連行された警察署で弁護士近衛豊に声をか
けられる。近衛はハチオこと朔田慎之助の弁
護を担当していた。朔田慎之助は植物状態に
なった母親の呼吸器の電源を切ったことによ
る殺人罪の情状酌量で執行猶予中の身であっ
た。
絶望するハチオと共にお記憶が戻らないこと
に絶望するナミ。二人は微笑ましく自殺し直し
崖

に 向 け たい。
夕 焼 け たい。
た て み よ う と 思 い ハ チ オ の 温 も り の 手 を 握 る ナ ナ ミ だ っ

・	・	・	・	・	・	・	・	【
近	田	三	谷	松	海	海	一	登
衛	中	橋	内	浦	野	野	ノ	場
豊	由	香	誠	(作	八	瀬	人
(衣	苗	(5	造	重	ナ	物
6	((2	8	(子	ミ	表
0	2	2	8)	7	((】
)	4	4)		0	7	2	
)))	0	4	
))	

○ 海沿いの道
澄み渡る青い空にどこまでも広い海。

海に沿った辺鄙な道を走るバス。
揺れる車内には前方にお婆さんが一
人、後方に一人しかいない。
後方の座席で頬杖をつきながら海を
見ている一ノ瀬ナナミ（24）。

○ バス停
止まっていたバスが走り出す。

軽装のナナミがバスを見送っている。

○ 寂れた商店街
人気のない通りをトボトボと歩くナ

ナミ。
店は軒並みシャッターが下りている。

電柱や壁に『ひとりじゃないよ』『知
らせてほしい SOS』『立ち止まって、
振り返って、手を握って』などの自
殺防止ポスターが貼ってある。
唯一営業している食堂の前で立ち止
まるナナミ。

○ 食堂『海坊主』
扉を開けナナミが入ってくる。

八重子「らっしゃい」
奥から海野八重子（70）が来る。

八重子「好きな席にお座り。決まったら呼
びな」
ナナミ、適当な席に座りメニューを
見る。

メニューにはナポリタンやハンバー
グ、トンカツや寿司、餃子にラーメン
もある。

ナナミ「デパ地下のレストランかよ……」
八重子（声）「あっひゃっひゃっひゃー！」

ナナミ、声の方を見るとレジの奥で
テレビを見て八重子が笑っている。

ナナミ「……すいません……すいません！」

八重子「はいよ」

ナナミ「八重子、面倒そうに腰を上げる。
ナナミ「ハンバーグとトンカツ、それにラ
メン」

× × ×
運ばれてくるハンバーグとトンカツ
とラーメン。
八重子「はい、お待ちどお」

八重子「はい、お待ちどお」
テーブルに置かれるなり食らいつく
ナナミ。

八重子「よく食べるねえ。最後の食事かい？」
ナナミ「（箸を止め）え…」

八重子「今時こんな辺鄙なとこに来るのは飛
びに来る連中くらいさ。あ、ちなみに今月
はあんたで四人目だ」

ナナミ「…また四人目」

八重子「不快そうに食事に食らいつくナナミ。
こったね。中途半端に飛んで痛い思いだけ

して死ねなかった人もいたからねえ」
ナナミ「あの…止めたりしないんですか？」

八重子「止める？なんで？あんたが死にこ
こに来て、飛んで、死んだら、それがあん

たの寿命だったってことさ。死にきれなき
やまだ寿命じゃないってこと。ただそれだ
けのこった。私にや関係ない」

奥へ戻っていく八重子。

ナナミ「…」

○ 同・外

店から出てくるナナミ。
軽くゲップをし海の方へ歩き出す。

○ 崖

崖に打ちつける波。
風吹く断崖絶壁にやってくるナナミ。
海を見て大きく深呼吸をする。
カバンをおろし、靴を脱ぎ、ポケッ
トからスマホと財布を取り出す。
スマホの画面には『クソ会社』から

ナナミ「（不快な顔）…」
着信履歴が多数。

スマホを海にぶん投げる。
数秒後にチャポンという音。
少しすっきりとした表情のナナミ。
崖の先端へ歩いて行き、恐る恐る下
を覗く
ゴツゴツした岩に打ち付ける波。
顔が引き攣るナナミ。

ナナミ「（フツと一息吐き）…よし」
覚悟を決めたとき、強い風が吹く。
思わず身を翻すナナミ。
そんな自分に嫌気がさし溜息をつく。
ふと見た目線の先に、何かを見つ
ける。

恐る恐るそれに近寄っていくナナミ。
それが倒れてる若い男性だと分かる。

ナナミ「え？」
ナナミ、キョロキョロと周辺を見る。

倒れている男性に目をやる。

ナナミ「ええ…」

崖の方を見る。

数歩崖へ踏み込むが、立ち止まり振
り返り倒れている男性を見る。

ナナミ「…」
崖を見る。

ナナミ「…」
男性を見る。

ナナミ「…」
不服そうに男性に近寄るナナミ。

ナナミ「…あ、あのお…ちよっと…大丈夫で
すかあ」

気絶したままの男性。

ナナミ、男性を揺すってみる。

反応がない。

ナナミ「こんなところで寝てたら風邪ひきます
よお…！」

男性の顔に顔を近づけるナナミ。

男性の呼吸音が聞こえる。

ナナミ「よかったあ…」

男性「うう：」
ナナミ、驚き距離を取る。

男性「うう：」

ナナミ「：あのお」

男性「：水」

ナナミ「エ？」

男性「水：」

ナナミ「あ、はい」

ナナミ、自分のカバンを漁り、中からミルクティーのペットボトルを取り出す。

ナナミ「あの、これしかないんですけど」

男性「：飲ませて」

ナナミ「あ、はい」

男性の口にミルクティーを注いでやるナナミ。

男性「：あまあい」

ナナミ「すいません」

男性「：ここは？」

ナナミ「へ？あ、崖です」

男性「崖：（少し先を覗くようにして）あ、崖だ。怖い：うう」

ナナミ「大丈夫ですか？救急車呼びま：あ」

ナナミ「：あ、あの方を見て悲しい表情。」

いですか？：あの、携帯電話お持ちじゃないですか？：あの、ちよっと？」

男性、また気を失っている。

ナナミ「ええ：」

男性を助けるか、飛び降りるかを悩んでキョロキョロとするナナミ。
タイトル。

○ 食堂『海坊主』・外観

暖簾のかかった店先に近づいてくる足音。

作造（声）「今日の客はよう食う客だったな。デブか？」

八重子（声）「いやあ、ちんちくりんの女だったよ」

○ 同・店内

八重子と旦那でシェフの海野作造（70）と、客の松浦（58）が座

ってお茶を飲んでいる。

松浦「ランキングに変動ありかね？」

作造「さて、どうかねえ」

作造、ノートを開く。

ノートにはお客が頼んだメニューに正の字で数が数えられている。

大きく見出しで『最後の食事ダービー 2025』とある。

作造「えーと、ハンバーグに、トンカツに、ラーメンと」

八重子「あとプリンアラモードも食ってった」

作造「あーそうだそうだ」

松浦「大食いだねえ。さ、変動は？」

作造「えーと：」

入り口から男性を背負ったナナミが入ってくる。

気づいていない三人。

作造「あー、海鮮丼とステーキにラーメンが並んだね！」

八重子「こりゃ例年稀に見るデッドヒートだ」
松浦「お、上手いこと言うね！」

笑う三人をじっと見ているナナミ。

ナナミ「：あのう」

三人がナナミに気づき驚く。

八重子「何さ！驚かすんじゃないよ！」

ナナミ「（背負っている男性を見せ）降ろさせてもらってもいいですか？」

× × ×
並べた机の上に寝かされている男性を見下ろす四人。

八重子「あんた随分なお人好しだね。自分が死のうってのに人助けかい？」

ナナミ「：寝覚め悪くなるの嫌なんで」

松浦「寝覚めないと思うけど：」

男性「うう：」

作造「あ、起きた」
口をパクパクしている男性。

何を言っているのか聞き取ろうと近づく四人。

男性「：お腹：空いた：」

顔を見合わせる四人。

× × ×

おにぎりにがつく男性。

その様子をじっと見つめる四人。

作造「よっぽど腹減ってたんだねえ」

八重子「あんた名前は？どこの人？」

男性「：（首を傾げる）」

四人も首を傾げる。

松浦「覚えてないの？」

男性「：すいません。ごめんなさい」

松浦「いや、責めてるわけじゃないけど」

作造「（ナナミに）どこで見つけたの？」

ナナミ「え？：崖のそばで。倒れているのを見つけて」

八重子「（男性に）なんも覚えてないの？持ち物は？」

男性「（首を傾げて、ポケットなどを探ってみるが何もなく）：すいません。ごめんなさい」

八重子「あれまあ：記憶喪失ってやつかい？」

松浦「でも、そりゃえらいとこでなったものだな」

作造「どうするよ？この人」

八重子と作造と松浦、ナナミを見る。

ナナミ「え？：え？」

八重子「あんた、また崖行くの？」

ナナミ「：いやあ」

作造「じゃあこの人の面倒見てやらにゃあね」

ナナミ「え？なんで私が？」

松浦「そりゃあんたが拾ってきたんだから」

ナナミ「：はあ：」

ナナミ、男性を見つめる。

男性、指についた米粒を食べている。

○ 道

人気のない田舎道を歩くナナミ。

少し距離を保って後ろを着いていく

男性。

男性「あのお」

ナナミ「：（無視して歩く）」

男性「あのお、すいません」

ナナミ立ち止まり怒ったように振り返る。

ナナミ「着いて来ないでもらっていいですか？確かに助けちゃったのは私ですけど、こうやって元気に歩けるようになったのなら、一人でどこへでも行ったらいいじゃないですか」

男性「：どこに行けばいいんでしょうか？」

ナナミ「病院にでも行ったらいいんじゃないですか？」

男性「病院：どう行けば？」

ナナミ「：ああ！もう！」

○ 島村医院・外観

寂れた雰囲気のある町医院。

島村（声）「記憶喪失ねえ：」

○ 同・診察室

医者の島村（70）と向き合っている。性とななミが座っている。

ナナミ「そういうわけで。何も覚えてないし身元も分からないしで：」

島村「なるほどねえ：」

男性「すいません。ごめんなさい」

島村「謝らんでいい。責任を感じる必要はないよ。何も覚えちゃいないんだからしょうがないじゃないの」

男性「：はい」

島村「そうか：そうだな：」

島村、ナナミを見る。

ナナミ「？」

島村「（男性に）あんた、ちょっと席外してくるか？待合室におってくれ」

男性「はい：」

男性、不安そうな表情でナナミを見て待合室へ向かう。

島村「記憶喪失なら大きな病院で頭見てもらわんとなあ。それに身元不明じゃあ警察に届け出ないと」

ナナミ「はあ：」

島村「まあおかた、崖飛びに来たんだらうよ。こんな辺鄙なところに若いもんが来る理由なんてそれしかないわい」

ナナミ「そうでしょうね」

島村「あんたもだ」

ナナミ「？」

島村「あんたも自殺しに来たんだろ？命を粗末にしおって。けしからん」

ナナミ「：すいません」

島村「（ため息をつき）：とりあえず、頭を強く打ったというわけでもなさそうだ。診察は以上。ご苦労さん」

ナナミ「え？いや、あの人、どう：」

島村「どうって、そんなの俺の知ったことか」

ナナミ「死にたがってる人間助けてるほど暇じゃないんだよ、こっちは。それに、あんたはアイツの命を助けた責任がある。気軽に命なんて救うもんじゃないよ。医者のわしが言うのもなんだが」

ナナミ「：」

島村「あんたもアイツのおかげでこうして不本意ながら生きちゃってる。どうせ死に損なった命だ。もう少しだけ生きてみたらどうだ？」

ナナミ「：（曖昧に首を傾げる）」

島村「（笑い）アイツの世話してるうちに死にたくなくなるかも：まあもし気が変わらなければ、また来て死ねばいい」

ナナミ「：（不服そうに俯く）」

○ 同・待合室

診察室から出てくるナナミ。
ナナミを見る男性と目が合う。

ナナミ「：」

男性「？」

ナナミ「…（ボソリと）なんで」

○ 移動

バスが発進する。
ナナミと男性が並んで立っている。

ナナミ「なんで」 ×

× 電車が発車する。
ナナミ「なんで」 ×

× ホームに二人が立っている。
さっきとは違う色の電車が発車する。

ナナミ「なんで」 ×

× ホームに二人が立っている。
市バスが発進する。

ナナミ「なんで」 ×

× 二人が立っている。
夕焼けの道でマンションの前に立ち止まる二人。

ナナミ「なんで」

○ ナナミのマンション・部屋

男性「お邪魔します」
ナナミが電気をつけると天井から首

ナナミ「あ」
吊り用のロープが垂れ下がっている。

ナナミ「あ」
ナナミ、ロープを外し放り投げる。

男性「：気にしないでください」

ナナミ「分かりました」
ナナミ「あ、どうぞ、適当に座ってください

男性「あ、お構いなく」
ナナミ、キッチンへ向かう。

男性「部屋を見回す。
簡素で物は多くなく小綺麗な部屋。

本棚が気になり近づく。
『ポジティブの教科書』上機嫌の作

り方』『嫌われる勇氣』といった自己啓発本ばかりがズラリと並んでいる。

グラスを持つてくるナナミ。

ナナミ「嫌ですよね。自己啓発本だけの本棚って」

男性「え、いやあ：」

ナナミ「毎日帰ってきてその本棚が目に入ると、気が滅入るんです。皮肉なもんですよね。自己啓発本の所持数は、その人がどれだけ壊れちゃってるかを表す指標ですよ。お茶どうぞ」

男性「あ、ありがとうございます」

ナナミ「あ、私、一ノ瀬ナナミっていいです。

好きな言葉は、希望は絶望の始まりだ、です」

男性「ぜつ？：あ、僕は：」

ナナミ「分かんないんですね？」

男性「：すいません。ごめんなさい」

ナナミ「：何もかも忘れるって、どういう気分ですか？」

男性「どういう：何もかも覚えている状態を

忘れているので、なんとも」

ナナミ「あ、そっか」

気まずそうにお茶を啜る二人。

男性「すいません。迷惑ですよね。ごめんなさい」

ナナミ「そうですね。迷惑ですね。でも、仕方ないです、助けちゃったんで」

男性「あの、すぐ思い出さうで：すいません」

ナナミ「：お願いします」

○ 崖

激しく打ちつける波。

断崖絶壁に立つナナミ、覚悟を決めた表情。

ふと振り返ると男性が倒れている。

少し考えるが、頭を振り崖に走り飛ぶ。

海に向かって落ちていく。

着水したかと思いきや、そこは自己啓発本の海。

動揺していると、目の前に谷内誠（28）が女性を四人従えている。

誠「ごめん、お前四番目」

誠、従えている女性のうち一人と手を繋いで歩いていく。

その女性・三橋香苗（24）が振り返りナナミを見て。

香苗「ごめんね、ナナシ」

追いかけようとするナナミだが、背後でガシャーンと大きな音が聞こえて振り返る。

そこには大型トラックに衝突されペシャンコになった軽自動車。

大雨に打たれながら絶望の眼差しでそれを見ているナナミ。

ナナミ「（息切れしだし）イヤだ：イヤだ！」

○ ナナミのマンション・部屋

大汗をかいて目覚めるナナミ。

男性「おはようございます」

驚いたように横を見ると男性が体育座りしてナナミを見ている。

ナナミ「おはようございます：なんで体育座り？」

男性「こうしてるのが一番落ち着くみたいで」
ナナミ「そうですか：変わってますね」

男性「大丈夫ですか？」

ナナミ「え、何がですか？：大丈夫ですよ？
大丈夫に決まってるじゃないですか：て
ゆうか、大丈夫ってなんですか？：顔洗っ
てきます」

ナナミ、洗面台へ行く。

男性、ナナミを目で追う。

○ オフィス街

都会の喧騒。

大きなビルの前で見上げているスー

ツ姿のナナミ、憂鬱な面持ちで大きな溜息をつきビルに入っていく部長（声）「無断欠勤なんていい度胸してるじゃない、一ノ瀬さん」

○ オフィス 女部長の前に立たされているナナミ。

ナナミ「すいません」

部長「いくら電話しても連絡つかないし。社会人としてどうなわけ？え？」

ナナミ「：スマホ、失くしてしまっ」

部長「言い訳なんてどうでもいい。ま、役立たずだから出社してもらわなくても仕事に支障は全くないわけ。でもさ、給料貰ってるんでしょ？責任ってもんはないの責任ってもんは？え？」

ナナミ「：申し訳ありません」

部長「声が小さい。私だけじゃなくて、ここにいるみんなに聞こえるように謝って」

ナナミ「：申し訳ありませんでした！」

オフィスの中からくすくすと笑い声が聞こえる。

部長「ほら、目障りだからさっさと消えて」

ナナミ、トボトボと自分の席へ。近くの女性社員たちのこそこそ話が聞こえてくる。

女性社員 A「可哀想に。まあ仕方ないよね、

目をつけたのが運の尽きって感じ」

女性社員 B「よく出社できるよね？私だった

ら絶対無理」

ナナミ、無心でパソコンに向かって

タイピングを続けている。

画面上にはメールの本文に『お世話になっ」

ております。死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね』と打ち続けている。

○ ビル屋上

青空と高層ビル群。

ベンチに座り俯いているナナミ。ナナミ「死んでたはずなのに：」

ナナミ「あぁ：ダメだ：壊れてる。イヤだ
イヤだ」
鼻を吸り自分の両頬を叩く。

○ ナナミのマンション・外
トボトボ歩いて帰ってくるナナミ。
見上げると自室の電気がついてい
る。
小さな溜息をつく。

○ 同・部屋
鍵を開けナナミが入ってくる。
匂いを感じて嗅ぎながら奥に入っ
ていくと、男性がチャーハンを食
べている。

男性「あ、おかえりなさい」

ナナミ「：ただいま」

男性「あ、すいません。冷蔵庫にあるもので
勝手に作っちゃって。待ってようと思っ
たんですけど、お腹空いちゃって、それで：」

ナナミの顔が崩れ始め号泣する。

男性「え、あ、ごめんなさい勝手に冷蔵庫開
けちゃって！」

ナナミ「違います！そんなことで泣きませ
ん！」

子供のようになんとも泣きじゃく
るナナミを見て、どうすればいいか
分からずオドオドする男性

男性「あー、とにかく食べましょう！お口に
合うかわかりませんが。ヘキッチンに向か
いながら」不思議なもので料理はなんと
く作れちゃいました。もっと覚えておくべ
きことあるだろう！って感じですよ。融
通が効かないというか。記憶喪失って
面白い

うもんなですかね」
チャーハンとスープを持ってきて机
に置き、泣きじゃくるナナミを座ら
せる。

男性「さ、座って。食べましょう。食べた
らきっと元気が出ます」

ナナミ、少し泣き止み頷く。

ナナミ「……いだだぎまず」

チャーハンを口にする。

ナナミ「……」

男性「……」

ナナミ「……うわぁぁん！」

また大泣きするナナミ。

しかしチャーハンは食べ続ける。

男性、そんなナナミを見て微笑み、チャーハンを食べ始める。

男性「(食べながら)あ。今日一日覚えてないなりにいろいろ考えてみました。いくつか聞きたいことがあるんですけど、よろしいですか？」

ナナミ「(食べながら)よろしいですよ。答えられるか分からないですけど」

男性「どうして僕、あの崖にいたんでしょう？」

ナナミ「知りませんよ、そんなの」

男性「あ、もちろんご存知ないでしょうけど。」

ナナミさんなりの見解でいいので」

ナナミ「……死にたかったんじゃないですか？」

男性「え？」

ナナミ、テレビをつけて動画配信サービスを開き『2時間サスペンス』と検索し出てきた作品を再生する。

○ テレビ内・崖のシーン

犯人の男が女性を人質に海を背にしている。

前方には刑事たち。

犯人「来るな！それ以上近づくな！」

人質「お願い！これ以上罪を重ねないで」

犯人「うるさい！お前らに俺の気持ちかわかってたまるか！」

刑事「もういいだろ？さあその人を解放しろ」
犯人「黙れ！こいつを殺して、俺も飛び降りて死んでやる！」
一時停止。

○ ナナミのマンション・部屋

一時停止したナナミ。

続きを見たそうにしている男性。

ナナミ「これがあの崖です。サスペンスドラマで使われすぎて観光地みたいになってるんです。最近じゃどうせ死ぬならあそこです。なんて思う人も多くて、人気の自殺スポットになってます」

男性「へえ：え、じゃあ、ナナミさんも？」
ナナミ「はい。死ぬつもりでした。あなたさえ見つけなければ無事に死ねてたと思います。きっと今頃三途の川渡りきって閻魔大王のこの待合室でオレنجページでも読んでたんじゃないですかね」

男性「どうして死のうなんて：」

ナナミ「あなたがそれ言います？きっとあなたも私と同じですよ？」

男性「ああそっか：ですよ。すいません。

ごめんなさい」

ナナミ「：私、小学生の頃いじめられて「ナナミ、棚の上のメモを一枚切り取りボールペンでそこに名前を書く。お世辞にも綺麗とは言えない字で『一ノ瀬ナナミ』と書かれる。」

ナナミ「字が下手くそで。これ。特に昔からこのミが癖でこう書きちゃうんです。シに見えるでしょ」

男性「ああ、確かに」

ナナミ「そのせいであだ名がナナシでした。ナナシナナシって呼ばれて。こいつナナシだからって無視されて。当時は親を恨みましました。なんでカタカナなんかにしたんだって」

男性「はあ：」

ナナミ「それでも高校卒業まではそれなりにやり過ごして。大学はちよっと頑張って東京の大学に進学して。そこでもあんまり馴染めずに4年間過ごして。で、就活に何社も何社も落ちて落ちて落ちて。なんか最後になんか最後に内定貰えて」

○ 回想・ナナミの会社

新入社員たちが挨拶している。

ナナミ（声）「今までもなんとなくまくやれてこれたから、社会に出てもなんとかなるって思っていました」

ナナミ「一ノ瀬ナナミです。よろしくお願いします」

× 資料運びやデスクワークなど忙しいな
× 働いているナナミ。
×

ナナミ（声）「そこまでやりたい仕事でもなかったけど、やっているうちにそれなりにやりがいなんかもあって。なんだったら人生の中で一番充実してたかも、って感じで」

先輩社員の郷田（26）がデスクワークをしているナナミに声をかけにくる。

郷田「一ノ瀬、今夜一杯どうだ？」

ナナミ「え？」

郷田「飲みニケーションってやつだ。あ、ハラスメントだと思えば断ってくれ」

ナナミ「あ、いえ」

ナナミ（声）「男性からそうやって誘われるのも初めての経験で」

○ 回想・ムードのあるバー

カウンター席で並んで座っている郷田とナナミ。

郷田「新卒でいろいろ大変だろうけど、お前はよくやってるよ」

ナナミ「ありがとうございます」

郷田「髪、綺麗だね（触る）」

ナナミ「え、いや、そうでもないと思いますけど。シャンプーもできるだけ安いやつだし、ヘアケアとかそういうのもろくにしないですし」

郷田に見つめられるナナミ。
郷田、顔を徐々に近づけキスをしようとする。

ナナミの母（声）「（笑って）さっさと彼氏作って結婚して仕事なんか辞めちゃって、孫の顔見せなさいよ！」

ナナミ「：うん」

ナナミ（声）「母に言われたからってわけじゃないですけど、とにかく何か変えたいと思って、婚活パーティーに行ってみました」

○ 回想・婚活パーティー

数十人の男女が入り乱れ盛り上がっている会場の端の席でポテトを齧っているナナミ。

誠「お嬢さん」 周りの連中を恨めしそうに見ている。

ナナミ、驚いた表情で顔を上げると谷内誠がいる。

誠「相席よろしいですか？」
ナナミ「：どうぞ」

誠、ナナミの前に座る。

誠「苦手？ こういうの」

ナナミ「：得意か苦手か、確かめに来て、結果、苦手でした」

誠「（笑って）僕もです。なんだか僕ら気が合

いそうですね」
ナナミ「そうですね？ まだ２ラリーしか

会話してないですけど」
誠「ははは、面白いなあ。えっと（名札を見て）：ナナシさん」

ナナミ「一ノ瀬です」
誠「下の名前で呼んじゃダメ？」

ナナミ「馴れ馴れしくて嫌ですし、あとナナミですし」

誠「あ、これミカ！」

鬱陶しげにポテトを齧るナナミ。
誠「あ、ポテト美味そう。いただいていいですか？」

誠、ナナミのポテトを食べる。

ナナミ「え、許可出してないですけど。あと、ここビュッフェなんです食べたければ自分で取りに行ってください」

誠「いいじゃないですか」

ナナミ「よくないです。これだと私があなたのために使い走りさせられたことになり
ます」

誠「なりますかね？」

ナナミ「なりますよ。もう食べないでください
（ポテトの皿を自分に寄せる）」

誠「（笑って）結構ラリー続きましたね」

ナナミ「：そうですね。不本意ですけど」

なんとなくポテトをシェアして食べ
始める二人。

ナナミ（声）「話してるうちになんだか居心地
良くなって、それから何度かお会いして、
付き合うことになりました」

○ 回想終了・ナナミの部屋

ナナミ「このままこの人と結婚して仕事辞め
て子供産んで孫見せに実家帰ったりする
んだろうなあとか思ったりしてました」

男性「あのお」

ナナミ「なんですか？」

男性「まだ続きますか？」

ナナミ「続きますよ。だってここで終わりだ
ったら私死のうとしませんよね？てゆう
か、あなたが聞いてきたから話してるん
ですよ？こんなの思い出したくもないのに」

男性「すいません。ちよっとお手洗いに行き
たくなっちゃって。ごめんなさい」

ナナミ「：どうぞ」

男性「すいません：」

トイレに向かう男性。
怒っていたが一人になると悲しげに
なるナナミ。

○ 同・トイレ

座って用を足している男性。

扉がノックされる。

男性「え、あ、入ってます」

ナナミ（声）「知ってます。そのままそこで聞
いてください。ここからは端的に話すん

で」

男性「：はい」

× × ×
トイレの扉の前で体育座りしている
ナナミ。

ナナミ「さっき言ってた彼氏が付き合ってた
らとんでもないクズで。ギャンブルする
わ仕事は続かないわで私の貯金も使い込
みやがって。で、ある日、帰ってきたら知
らない女と彼氏が私のベッドでヤツてま
した。で、別れ話して。そしたらあいつ五
股かけてて。(自嘲気味に笑い)私、四股目
だったそうです」

俯くナナミ。

× × ×

真剣な面持ちで聞いている男性。

ナナミ(声)「で、それから一ヶ月後くらいに
大学の友達から結婚の連絡来て式に行っ
たんです。そしたら新郎がその彼氏でし
た。(笑って)友達が一股目だったんです」

男性「：」

ナナミ「職場でも居場所なくて、男でも失敗
して、友達も失って：もう全部捨てて地元
に帰ろうって思いました。で、決心して母
に電話をかけたんです。そしたら知らない
男性が出て。それ警察の方で。両親が乗っ
た車がいさっきトラックと衝突したつ
て。残念ながら即死ですって」

男性「：！」

× × ×

一点を見つめながら話すナナミ。

ナナミ「葬式終わっても信じられなくて：(無
理に笑い)それでもね、なんとか自分を誤
魔化しながら生きてたんですよ。でも、な
んかたまたまつけてたテレビの情報番組
で『自殺の理由ランキング』が発表されて
たんです。そしたら：上位5位までの3つ
に当てはまって。(声が震え出し涙を拭
いながら)あ、いいんだ死んで、私。って
思いました。(ここから早口で)すぐ首括っ

て死のうと思ったんですけど、一回あの崖
に行ってみたかったんで、それであの崖で
死のうと思いました。おしまい」

体育座りの膝の中に頭を入れ泣くナ
ナミ。

トイレの中から紙を巻き取る音のあ
と、水を流す音がしてから男性が出
てくる。

男性「(ナナミを見下ろし)…」

リビングに戻り食べかけのチャーハ
ンを二人分持ってくる男性。

ナナミの隣で同じく体育座りする。

ナナミの前にチャーハンを置き、自
分の分を食べ始める男性。

ナナミ「…なんか言いましょうよ」

男性「(食べながら)なんかと言われましても」

ナナミ「たくさん喋ったじゃないですか私。

かける言葉とか感想とか…なんかあるで
しょ」

男性「…悔しいですね、なんか。悪くないの
に…(苦笑し)うまく言えません。すいま
せん」

ナナミ「…」

男性「(能天気な)きっと僕も、死にたかった
んでしょうねえ」

ナナミ「…他人事みたいに」

男性「幸いなことに忘れてますから(笑う)」

ナナミ「…」

男性「あ、一つお願いがあって」

ナナミ「なんですか？」

男性「名前つけてもらえませんか？僕に。な
んでもいいんで」

ナナミ、顔を上げ男性の顔を見る。

ナナミ「…ハチ」

男性「ハチ…なんか、犬みたい」

ナナミ「じゃあ…ハチオで」

男性「ハチオ…あ、ナナミだから？」

ナナミ「やっぱやめましょ、くだらないんで」

男性「いやいや、全然！嬉しいですよ！ハチオ
…はい。ハチオで。ありがとうございます」

ナナミ「：どういたしまして」
ナナミもチャーハンを食べ始める。
狭い廊下で地べたに座りチャーハン
を食べる二人。

○ 同・リビング
消灯した部屋。

地べたで寝ているハチオの顔をベツ
ドから見えて少し微笑むナナミ
仰向けになり目を瞑る。

ハチオ「あのお：」

ナナミ「え？寝たんじゃないんですか？」
ハチオ「あゝ、まだでした。すいません。ごめ

んなさい」

ナナミ「別にいいですけど：」

ハチオ「なんか：胸張って死ぬるといいです

ね。お互いに」

ナナミ「：そうですね」

ハチオ「はい：」

間

ナナミ「：あの。ハチオさんは、思い出した
いですか？忘れちゃったこと」

ナナミ「：（少し微笑み）おやすみなさい」
ナナミ、返事がないのでハチオの様
子を伺うと、眠っている。

○ 同・玄関

スーツ姿で靴を履くナナミ。
ハチオが食パンを齧りながら見送り
に来ている。

ナナミ「さっき渡したお金でお昼はお願いし
ます。家出る時は鍵忘れないように」

ハチオ「分かりました：あのお」

ナナミ「（靴を履き終え）なんですか？」

ハチオ「今日はきつと、いいことあると思
います。いってらっしゃいナナミさん」

ナナミ「：いってきます。ハチオさん」
少し照れくさそうに出ていくナナミ。

○ オフィス

デスクとんでもない量のファイルが置いてあるのを目の当たりにしているナナミ。

部長「(やって来て) あぁーノ瀬さん。急遽案件が増えてねえ。留守電に入れといたんだけど、よく考えたらあなた携帯失くしてたんだっけ？ま、知ったこっちゃないんだけど。それ明日の朝までに全部まとめといて」

ナナミ「：(ボソリと) イヤです」

部長「はい？今なんて？」

ナナミ「やりたくありません。イヤです」

部長「あなたねえ。これ、仕事。分かる？」

ナナミ「そんなこと分かっています。分かった

うえでイヤだって言っています」

部長「なんなのあなた！？上司にそんな態度

でいいと思ってるの！？」

ナナミ「いいと思っただけじゃない。いいわけありません。それぐらい私にだって分かりま

す。(徐々にヒートアップする) クビになる

くらいのことだと思っただけです。クビですよ

ねこんなやつ。クビにしちゃえばいいじゃないですか！クビクビクビクビクビ！」

ナナミ、積まれたファイルを部長に

投げつけまくる。

他の社員が止めに入るが止まらない

ナナミ。

オフィスが大パニック。

○ 同・外

周りの目を引くほどスーツと髪が乱

れてビルから出てくるナナミ。

ナナミ「ごめんね、就活頑張ってた私」

一息吐いて、ビルの看板を殴り痛が

り歩き出す。

スマホで電話をしているサラリーマ

ンが目に入るナナミ。

○

ケータイショップ・外観

大きい通り沿いのケータイショップ。

女性店員（声）「ではこちらの 2 台で契約ですね。こちらの書類の太枠内の項目にご記入をお願いいたします」
ナナミ（声）「はい」

○ 同・店内

受付で書類を書くナナミ。
書き終わりに対応している店員に渡す。
店員「ありがとうございます。確認させていただきます」
ナナミ「はい」

書類に目を通す女性店員。
何かに気づいた様子。

店員「：ナナシ？」
ナナミ「あ、すいません字が汚くて。それミです」

店員「もしかして、上田の一ノ瀬ナナミさん？」
ナナミ「え？あ、はい」

店員「私、美山由衣！ほら塩尻小で一緒だった！」

ナナミ「：由衣ちゃん？五年生の時に転校してた？」

由衣「そう！懐かしい！こっち来てたんだあ」
ナナミ「ああ、うん。大学こっちで」

由衣「そうなんだあ！携帯も無くて連絡先知らないままだったから：すごい偶然」

ナナミ「そうだね」
由衣「そうだ。ちょっと待ってて」

ナナミが契約したスマホを持って裏に行く由衣。
由衣を目で追うナナミ。

○ 商店街（夕方）

田中由衣から連絡が来ている。
『久しぶりに会えて嬉しかった！』
『今度ご飯行こ！』
というメッセージ。
歩きながら嬉しそうにスマホを見ているナナミ。
ハチオ「ナナミさん？」

ナナミが顔を上げると少し先にハチオがおり、黄色い花を持って駆け寄ってくる。

ハチオ「おかえりなさい」

ナナミ「ただいま：それは？」

ハチオ「これ、さっきお花屋さんで見て、なんかナナミさんっぽいなあと思って」

ナナミ「：（じっと花を見つめる）」

ハチオ「あ、その：いいことあるって言っちゃったんで」

ナナミ「？」

ハチオ「今日いいことありますよって言ったじゃないですか？でも考えてみたら、もし万が一ナナミさんに何もいいことなかったら、僕嘘つきになっちゃうなって。だから一応保険で、これ。いいことで、はい」

ナナミ、ぷつと吹き出し笑い出す。

ナナミ「ちなみに、黄色いカーネーションの花言葉は軽蔑ですよ」

ハチオ「え！？そうなんですか：すいません。ごめんなさい」

ナナミ「いえ。嬉しいです。ありがとうございます。います。でもちゃんといいことありましたから。保険、大丈夫でしたよ」

ハチオ「そうですか！それはよかった！」

ナナミ「（微笑み）帰りましょうか」

ハチオ「はい」

二人並んで歩き出す。

ナナミ「あ、仕事辞めてきました。辞めたというか、クビになってやりました」

ハチオ「そうですか」

ナナミ「あれだけ思い詰めて無理してたけど、いざ辞めるってなったらあっさりしたものでした。こんなことならもっと早く辞めてればよかったです。やろうと思えば案外やれるもんですね」

ハチオ「一度死んだようなものですから、僕たち」

ナナミ「：です。ね。死んだようなものでも。んね。死に損ないですもんね、私たち」

微笑むナナミを見て笑顔になるハチ
オ。 × × ×
夕日に染まる肉屋ののぼり。
買い物袋を片手にコロッケを頼張り
ながら歩く二人。
ナナミ「仕事辞めた帰り道に親の遺産金で食
べるコロッケは格別ですね」
ハチオ「はあ…なんか食べにくくなりますね」
ハチオ「ナナミさん、ちょっとすいません」
ナナミ「？」
コロッケをナナミに渡し歩き出すハ
チオ。
後を追うナナミ。
商店街の出口付近の自転車置き場の
あたりで、うずくまって泣いている
男の子に声をかけるハチオ。
ハチオ「どうしましたか？」
男の子「お母さんがいないの」
ハチオ「そうですか…お母さんとお買い物に
来たんですか？」
男の子「うん」
ハチオ「一緒に探しましょうか？」
男の子「うん」
ハチオ「じゃあ、行きましょう」
ハチオ「ナナミさん、この子迷子みたいで。
お母さんを探してあげたいんですけど」
ナナミ「そう…あ、（男の子に）コロッケいる？」
男の子「知らない人から物を貰っちゃダメだ
ってお母さんが言ってた」
ナナミ「そう…美味しいのに（コロッケを食
べる）」
ハチオ「きつとお母さんも探してますよ。行
きましょう」
歩き出す三人。
ナナミ「…お人好しですね」
ハチオ「そうですね？」
ナナミ「そうですよ。普通は見てみぬフリを

します。人間二十年以上生きてるとあらゆる物事を見てもみぬフリして円滑に人生を送ろうとするものです。道端にゴミが落ちてても、いつか来るであろう清掃員に任せ拾わないし、人が倒れててもいつか来るであろう正義感強めのサラリーマンに任せて助けないし、靴下が落ちてても、あ、靴下だ、こういうシチュエーションで落とすんだろう、って立ち止まりもせず思うだけだ」

ハチオ「そんなこと言って、ナナミさんは僕を助けてくれたじゃないですか。あ、なんか男の人が倒れてるけど関係ないや、飛んじゃおう、ってなってないじゃないですか。ナナミさんこそお人好しです」

ナナミ「私はそんなんじゃない」

男の子「あ！ママ！」

男の子が駆け出す。

遠くからお母さんが血相を変えて男の子に駆け寄り抱きしめる。

ナナミ「：よかったですね」

ハチオ「はい。よかったです」

母子、二人に気付きお辞儀をし帰っていく。

手を振るナナミとハチオ、母子の後ろ姿を見つめる。

ナナミ「私も、母に会いたくなっちゃった」

ハチオ「：僕にも母親がいるんでしょうか。どこかに」

ナナミ「：思い出したいですか、記憶」

ハチオ「うーん：死のうとしてたぐらいですから、きっと思い出したくないんだと思います。でも：もし僕にもああいうお母さんがいたのなら、それは、思い出したいです」

ナナミ「：」

母子の後ろ姿を見つめ続ける二人。

○

ファミレス

ドリンクバーでグラスに氷を入れ、

由衣「転校する時めちゃくちゃ泣いてたよ
ね？バスの窓越しに聞こえる声でユイち
ゃーん！って。恥ずかしかったああれ」
ナナミ「だって私、友達なんて由衣ちゃんし
かないなかったから」
× × ×
ボックス席に座りジュースを飲んで
いるナナミと由衣。
由衣はスマホ店員の制服の上から上
着を羽織っている。
由衣「私がいなくなった後のナナミが心配だ
った。こうやって生きて会えて安心したよ」
ナナミ「どうも、ご心配おかけしました」
由衣「いやあ：あまりにも久しぶりすぎて驚
くやら嬉しいやら：ナナミの字が下手で
良かったよ（笑う）」
苦笑いするナナミ。
由衣「今は独身？彼氏は？」
ナナミ「いません」
由衣「じゃあ仕事に邁進って感じ？」
ナナミ「つい先日無職になりました」
由衣「あら！そう：それは大変だあ」
ナナミ「あ、ネガティブな無職じゃないから
大丈夫。ポジティブな無職だから」
由衣「ポジティブな無職？何それ（笑う）」
ナナミ、少し誇らしげにジュースを
飲む。
由衣「四半世紀も生きてるとさ、お互い
いろあるよねえ。ナナミの顔見たら分かる
よ。いろいろあったんだあって」
ナナミ「そうだね：いろいろありますだよ。
平穩無事に暮らしたいだけなのに」
由衣「笑って（だけ）って、それは高望みだね。
平穩無事なんて。あ、娘の写真見る？」
由衣がスマホの待ち受けの娘の写真
をナナミに見せる。
ナナミ「え！子供いるの？」
由衣「もう五歳になる。大学の時にね」
ナナミ「そうなんだあ：」

由衣「あ、意外と奔放なんだとか思ったでしょ？ 違うからね。二つ上の先輩と純愛でちゃんと結婚しましたから」

ナナミ「そっか…（微笑）じゃあ幸せなんだ」

由衣「だったんだけどねえ…」

ナナミ「？」

由衣「去年、旦那が病気で死んじゃって。今はシングルマザー未亡人やってます」

ナナミ「…（複雑な顔）」

由衣「（笑って）そんな顔しないでよ。幸せなんだよ。子供がいるからさ」

ナナミ「…大変だったね」

由衣「大変だったよお！そりゃあもう！ああ、死んじゃおうかな、娘も一緒について、本気で考えたもんね」

ナナミ「…」

由衣「でもさ、夜子供の寝顔見て思うの。この子の明日と一緒に明日も生きようって」

ナナミ「…」

由衣「大学中退して友達も離れてって親にも見放されて旦那には先に逝かれて。娘はいるけど、正直すごく孤独で。だからこうやってナナミと久しぶりに会えて、なんか勝手に、すっごく救われた気持ちになったの」

：あ、ごめんね、重いよね（笑う）」

ナナミ「ううん：そっか：頑張ったね、由衣ちゃん」

由衣「頑張ったねって：やめてよお、そういうの。泣けてきちゃう」

紙ナプキンで鼻をかむ由衣。

そんな由衣を見つめて思うナナミ。

由衣「（笑顔で）ほら、なんか甘いもの食べよ！

祝おう再会を！ね？」

ナナミ「うん」

○ ナナミの部屋・リビング

クイックルワイパーを片手に棚の上のナナミの両親の写真をじっと見つめているハチオ。

ナナミ（声）「ただいま」

写真から目を逸らしクイックルワイパーをかけだすハチオ。
扉が開きナナミが入ってくる。

ハチオ「おかえりなさい」

ナナミ「スマホ使えました？」

ハチオ「ええなんとか。ナナミさんに連絡するくらいはできそうです」

ナナミ「そうですか」

ナナミの挙動で何かを感じるハチオ。

ハチオ「：何かありました？」

ナナミ「いえ別に：何かありました？って質問ってどういう意味ですか？何かありました？ってそりゃ何かはありましたよ？外出たし、パフェ食べたし、ドリンクバー5周したし、帰り道にめちゃくちゃでかいシベリアンハスキー見ましたし」

ハチオ「なにかあったんですね？」

ナナミ「（俯いて）：なんか」

ハチオ「あ、言いたくなければ言わなくても：」

ナナミ「今言いかけてたんですけど」

ハチオ「あ、すいません。ごめんなさい」

ナナミ「：別にハチオさんに話すようなことじゃないんで。大丈夫です」

キッチンに向かうナナミを目で追うハチオ。
水道水をくみ一杯飲み干し、シンク

を見つめるナナミ。
ナナミ「なんか：すごく死にたくなりました」

ハチオ「？」

ナナミ「（ハチオを見て）やっぱり死のうと思

います、私」

ハチオ「どうしてですか？あ、言いたくなければ：」

ナナミ「言いたいんで。言います。久しぶりに小学生の頃の友達に会ったんです。私、あの頃なんて最悪で思い出したくもないことばかりで。でも、友達は私との思い出をとてでもいい思い出として話してて。そ

れで：すごく自分が嫌になって。その友達
は私よりもっと全然比べものにならない
くらい大変なことがあったのに、それでも
逃げずに頑張って生きてて。それなのに私
は：って」

ハチオ「だったら、その友達を見習ってナナ
ミさんも頑張って生きようってならない
んですか？」

ナナミ「ハチオさんはわかってません。私は
そんな前向きな人間じゃありません。私っ
てブラックホールなんです。周りのどんな
に明るい光も吸収して歪ませて真っ暗に
しちゃうんです」

ハチオ「ブラックホール？：勉強しときます」
ナナミ、両親の写真を見つめる。

ナナミ「一度死ぬ覚悟をしたんです。両親の
元に逝こうって覚悟したんです。それなの
になんか生きてて：あ、別にハチオさん
を責めてるわけじゃないんで謝らないで
ください」

ハチオ「あ、はい：」

ナナミ「その友達に、ナナミに会えて救われ
たって言われました。それが、ものすごく
嬉しかったんです。でも、なんていうか：
うまく言えないけど：もう中途半端に希
望を持って生きたくないんです。なんかこ
れからいいことありそうな予感がするん
です。もうそれが耐えられないんです。こ
の感じ、分かりませんか？分かりますか？分
からないですよ。すいません」

ハチオ「：すいません。分かりません」

間

ナナミ「ハチオさんは：どうしたらいいと思
いますか？」

ハチオ「え？そうですね：ナナミさんがした
いようにすればいいと思います。ナナミさ
んの人生ですし」

ナナミ「：冷たいんですね」

ハチオ「え、そうなんですか？でも、他人が
とやかく言う事じゃないと思いますし」

ナナミ「そうですか：そうですね」
ハチオ「：（掃除を再開し）ナナミさんが死ぬなら、僕も死のうかな」
ナナミ「え？なんでですか？そんな連れションみたいなノリで言うことじゃないと思いますけど。別にハチオさんは死ななくてよくないですか？全部忘れてるし。第一、死にたくないでしょ？」
ハチオ「ええ、まあ。でも、僕にはナナミさんしかいないんで、生きててもしょうがないですから」
ナナミ「：そういうことサラッと言えるの、すごいですね」
ハチオ「あ、そうだ！ナナミさんは死ぬ前に何かやり残したとことかないですか？」
ナナミ「やり残したとことないですか？」
ハチオ「どうせならやりたいことやってから死にませんか？」
ナナミ「やりたいこと：」

○ 表参道

高級ブティックなどが立ち並ぶ大通り。ハチオ「すごい人ですね」
ナナミ「ですね」
ハチオ「行きたいお店とかあるんですか？」
ナナミ「ありません。きつとここにいるほとんどの人がそうだと思いますよ？目的も無くなるとなくここを歩いている自分に酔ってるんです。ハチオさんもほら、もっと表参道を歩いてる自分に酔わないと」
ハチオ「あ、はい、分かりました。酔います」
ナナミ「あ、うわあ」
高級ブティックのショーウィンドウに飾られている煌びやかなドレスに、羨望の眼差しを向けるナナミ。
ハチオ「欲しいんですか？」
ナナミ「別に欲しくはないです。でも私も一応女の子ですから。一度くらい着てみたいとは思いますが。欲しくはないんですけど」

ハチオ「：買ってあげましょうか？」
ナナミ「自分が誰かも分からない無一文が何
言ってるんすか。行きますよ」

○ パンケーキ屋

テーブル席に座る二人の前にそれぞ
れ置かれる大きなパンケーキ。

ハチオ「わあ：」

ナナミ「いただきます」

黙々と食べ始めるナナミ。

ハチオ「これ、どうやって食べるんですか？」

ナナミ「どうやってって、自由に食べればい
いと思いますよ」

ハチオ「ナナミの口の周りがクリームだらけ。
になつてます」

ナナミ「こういうのは口の周りがすごいこと
になればなるほどいいんです。ほらハチオ

さんも早くすごいことになってください」
ハチオ「わ、分かりました」

ハチオも食らいつく。

下品に食べる二人に周囲の客が少し
引いている。

○ カラオケボックス

津軽海峡冬景色を気持ちよさそうに
歌っているナナミ。

ナナミ「凍えそうなカモメ見つめ泣いていま
した♪ あゝあゝ津軽海峡冬景色♪」

ハチオ、全力で拍手。

点数が出る。86点。

ナナミ「あー全然ダメです！」

ハチオ「お上手でしたよ？」

ナナミ「ジョイサウンドが86点って言って
るんで。100点取るまで死ねません！」

デンモクで次の曲を探すナナミ。

呆れて笑うハチオ。

ナナミ「ハチオさんはカラオケで何歌ってた
んでしょね？」

ハチオ「さあ……どういいうの歌ってそうです？」
 ナナミ「うーん……意外と盛り上がる曲入れて
 コール&レスポンスを強制するような役
 回りだったかもしれませんよ。私の嫌いな
 タイプの」
 ハチオ「えーそれだったらイヤだなあ」
 ナナミ「ドブネズミみたいに美しくなりたい
 写真には写らない美しさがあるから……リ
 ンダリンダ♪リンダリンダリンダ♪ほ
 ら一緒に！」
 ハチオ「へ？あ、リンダリンダ♪」

○ ナナミの部屋

カーテンを閉め切った暗い部屋でソ
 ファーに並んで座る二人。
 テーブルにはお菓子や飲み物、そし
 てハリポッターのDVDが積まれ
 ている。

ハチオ「これ、全部観るんですか？」

ナナミ「(DVDを入れて)ハリポッターぶ
 っ通し鑑賞会。やってみたかったです。

ハチオ「いいなあ。初めて観るんだも
 ん。記憶喪失が羨ましいです」

ハチオ「こんな一気に見たら死んじやいそう
 ……」

ナナミ「はいスタート！(リモコンを押す)」

× × ×
 食い入るように映画を見ている二人。

× × ×
 ポップコーンを食べて少し飽きてい
 るようなナナミと、まだまだ食い入
 るように見ているハチオ。

× × ×
 台所からパスタを二人分持ってくる
 ナナミと、まだまだ食い入るように
 見ているハチオ。

× × ×
 ウトウトしているナナミと、まだま
 だ食い入るように見ているハチオ。

× すっかり眠ってしまったているナナミ
と、まだまだ食い入るように見ているハチオ。
×
『ハリー・ポッターと死の秘宝 Part2』のラストシーンが流れエンド
ロールが始まった。
泣きじゃくった顔をしているハチオ。
その肩に頭を預けて眠るナナミ。
ナナミを少し見て微笑むハチオ、頭
をナナミに預け目を閉じる。

○ 長野の山の風景
雄大な自然のカット。

○ 上田の霊園
一ノ瀬家の墓の墓跡を掃除用具で墓
を洗っているナナミとハチオ。
ナナミ「よし、綺麗になった。もうすぐ私も
入るから綺麗にしとかないと」
ハチオ「でも、崖から飛ぶとここには入れな
いんじゃない」
ナナミ「あ：まあでも、魂的なそれはここに
宿るようになって、頑張るんで、それは」
ナナミ、墓に手を合わせ黙祷する。
ハチオもそれに倣う。

○ 熱気球
バーナーから火が噴き出て気球が浮
かび出す。
テンションが上がるナナミと怖がつ
ているハチオ。
ハチオ「なんですかこれ!! 怖い!!」
ナナミ「熱気球です! 一度乗ってみたかった
んです!」
気球が到達地点でストップする。
ナナミ「うわあ：すごい」
神々しく昇っている朝日に見惚れて
いるナナミ。

ナナミの横顔を見ているハチオ。
ナナミ「…（視線は朝日に向いたまま）あの、
こんな朝日ってなかなか見れない貴重な
朝日なんで、目に焼き付けた方がいいと思
いますけど」

ハチオ「（ナナミを見ながら）そうですね。目
に焼き付けます」

ナナミ、恥ずかしそうにハチオ側の
横顔を手で隠す。

ハチオ「あ、ちょっと、なんでですか？」

ナナミ「私の顔は見せ物じゃないです」

ハチオ「でも綺麗ですよ」

ナナミ「…（ハチオを蹴る）」

ハチオ「痛っ！ちょ、揺れます！怖い！」

○ 遊園地

ジェットコースターから悲鳴。

降りてきた様子の二人。

ナナミは楽しそうで、ハチオはげん
なりしている。

ナナミ「あー楽しかった！」

ハチオ「死ぬかと思いました」

ナナミ「（笑って）崖から落ちるのもあんな感
じなら楽しみなあ」

ハチオ「僕は自信がなくなってきました…」
ナナミが立ち止まる。

ハチオ「どうしました？」

香苗「もしかしてナナシ？」

ハチオ、ナナミの目線の先を見ると

香苗と誠がいる。

香苗が駆け寄ってくる、

誠は気まずそうに香苗についてくる。

曇った表情のナナミ。

香苗「すごい偶然！あれ？もしかして彼氏？」

ナナミ「そんなんじゃないよ。友達」

誠「こんにちは。久々だねーノ瀬さん」

ナナミ「…ども」

香苗「結婚した途端にどこにも連れて行って
くれなくなったのよ。だから腹たっちゃっ
て、今日は強制的に遊園地デート」

ナナミ「そうなんだ：」

香苗「ねえもうお昼食べた？ 私たち今からな
んだけど一緒にどう？ ねえいいでしょ」

ナナミ「え：（誠を意識し）」

誠「そんな一方的に決めるなよ。一ノ瀬さん
たちにもベースがあるんだから」

ハチオ「：すいません。ごめんなさい」

○ 同・フードコート

香苗「じゃあ私とナナミで食事調達してくる

んで、男どもは席取りよろしく」

誠「はいはい」

香苗、ナナミの手を引き店へ向かう。

誠「ごめんね、うちのが強引に」

ハチオ「いえ、お腹空いてたんで」

誠「えっと、君は：」

ハチオ「あ、ハチオです」

誠「ああ、ハチオくん。一ノ瀬さんとはどう
いう関係？」

ハチオ「どういう：どういう関係なんでしょ
う？」

誠「QにQで返さないでよ。なにハチオくん、
おもしろいね（笑う）」

愛想笑いしながらナナミの行った方
を気にするハチオ。

× × ×

香苗「びっくりした。結婚式ぶりだもんね。
あれから全然連絡くれないんだもん」

ナナミ「ごめん。携帯無くしちゃって」

香苗「そうだったの？ なんだあ。てっきり避
けられてるのかと思ってた」

ナナミ「避けるってなんで：」

香苗「だってナナミ、誠と付き合ってたじゃ
ん？」

ナナミ「え：」

香苗「知ってたよそれくらい。でも安心した。
新しい男見つけて楽しくやってんじゃない」

誠「ハチオくんはさ、一ノ瀬さんのこと狙っ
 てんの？」
 ハチオ「え、狙うっていうのは……」
 誠「いやだから、好きなのかってこと」
 ハチオ「ああ、それはもちろん。好きです」
 誠「そうなんだあ、へえ（ニヤつく）」
 ハチオ「何か面白いですか？」
 誠「ハチオくんさ、一ノ瀬さんの何がいの？」
 ハチオ「何って……全部です」
 誠「ベタ惚れじゃん（笑う）」
 ハチオ「……」
 誠「いやあでも、一ノ瀬さんはやめといた方が
 いいと思うな。彼女って絶望的にネガテ
 イブだから、一緒にいてなんか気が滅入っ
 てこない？」
 ハチオ「（少しムツとして）いえ全然。一緒に
 いてすごく楽しいです」
 誠「マジ？ 変わってるねえ」
 ナナミ「……いつから知ってたの？」
 香苗「付き合ってた頃から。あいつナナミの
 他にも何人かいたでしょ？ 全部知ってた」
 ナナミ「知ってて結婚したの？」
 香苗「結局私を選んだからあの人。だったら
 都合いいじゃん？ 一生尻に敷けるし。あ、
 飲み物どうしよ？ コーラがいいかな？」
 ナナミ「私を結婚式に招待したのも……」
 香苗「あーあれね（笑って）私も性格悪いよ
 ね。まあ来ないだろうけど友達だし一応っ
 て招待状送ったら、ナナミ本当に来るんだ
 もん。ビツクリしちゃった」
 ナナミ「……（俯く）」
 香苗「あの時はごめんね。まあいろいろあつ
 たけどさ、これから仲良くしてよ。ね？」
 ナナミ「……私はいいい」
 香苗「え？」
 ナナミ「私とハチオは何もいらない！」
 ナナミ「……駆け出す。」
 ナナミ「……」

誠「ぶっちゃけるとさ、俺、一ノ瀬ナナミの元カレなんだよね」

誠「だから身をもつて分かるわけ。ナナミちゃんはやめといた方がいい。めんどくさいからあの子。まだ男女の関係になってないならここまで。先輩からの忠告：」

ハチオ、誠の顔を殴り飛ばす。

倒れた誠に馬乗りになり顔を何度も殴りつける。

周りの客も騒然。

ナナミがやってくる。

ナナミ「ハチオさん！？ちよっと！やめて！」
必死にハチオを止めようとするが止まらず殴り続けるハチオ。

○ 警察署・外観（夜）

サイレンが鳴っている所轄署。

○ 同・廊下

刑事に連れられ二人が刑事課の部屋から出てくる。

刑事「もう夢の国で暴力沙汰なんておこしちゃダメだよ」

ナナミ「すみませんでした」

ハチオ「すみませんでした」

刑事が戻って二人が歩き出す。

すれ違った初老の男性・近衛豊（60）が立ち止まり振り返る。

近衛「慎之助くん？」

止まらない二人に駆け寄りはおの腕を掴む近衛。

振り返り近衛を見るハチオ。

ハチオ「？」

近衛「探したよ慎之助くん！どこにいたの？」

ナナミ、ハチオを見る。

ハチオ、ナナミを見て近衛を見る。

ハチオ「それは、僕のことですか？」

近衛「？（ナナミを見る）」

ナナミ「：」

○ 喫茶店

近衛「記憶喪失、ですか」
ナナミとハチオの手元に近衛の名刺。

ハチオ「すいません。ごめんなさい」
ナナミとハチオと近衛がテーブルを

近衛「いやいや。そうですか。それはそれは

：大変でしたな」

ナナミ「本当は警察に届け出るべきなんです
けど：すいません」

近衛「いや：事情はなんとなくは、はい」
ナナミ「あの、近衛さんはハチ：この人の弁

護を？」

近衛「ええ、一度担当を（ハチオを見る）」
呑気にバナナジュースを飲むハチオ。

近衛「そうですか：全て忘れていきますか：」
ナナミ「何か？」

近衛「いや。慎之助くん：あ、えっと」

ハチオ「ハチオです」

近衛「ハチオくん：君は思い出したいです
か？自分が忘れてしまったことを」

ハチオ「（曖昧に首を傾げ）さあ：思い出した
いこともありますが、思い出したいくない

こともあるんだろうし」

近衛「そうですか：困りましたなあ」

ハチオ「すいません。ごめんなさい」

近衛「いやあそんな：（溜息をつき）弁護士
としては、君に何があったのかをきちんと

説明すべきなのでしょうが：」

俯く近衛を見つめるナナミ。

ナナミ「ハチオさん、先に帰っててください」

ハチオ「え？」

ナナミ「近衛さん、私が聞きます。私が聞い
て、判断します。そうさせてください」

ハチオ「いやなんですか？僕も聞きますよ
一緒に」

ナナミ「分かんない人ですね。今この状況で、
ハチオさん邪魔なんです。近衛さん優しい
から言わないけど」

ハチオ「（近衛に）そうなんですか？」

近衛「え？いや、まあ、邪魔というか：」

ハチオ「ええ：」

ハチオ「ハチオ、渋々ながら席を立つ。」

ナナミ「終わったら連絡します」

ハチオ「：はい」

ハチオ、恨めしそうに二人を見ながら店を出る。

近衛「お気遣い、ありがとうございます」

ナナミ「いえ」

近衛「しかし一ノ瀬さん。あなたは厳密には

無関係な方です。知らなければよかったと

後悔するかもしれませんよ」

ナナミ「：その辺は、大丈夫です。それとも

落ちるんで」

近衛「はい？」

ナナミ「いえ：」

近衛「：では、単刀直入に申し上げます。彼の

名前は朔田慎之助。執行猶予中の身です」

ナナミ「執行猶予：？」

近衛「はい。彼は先月、殺人罪で懲役3年、

執行猶予5年の判決を下されています」

ナナミ「それは、その：どういう？」

近衛「いわゆる：母殺しです」

ナナミ「：」

近衛「：いや、今はよくない。申し訳あり

ません。順を追って説明します」

○ 道路

不貞腐れた様子で歩いているハチオ。

近衛（声）「朔田慎之助。23歳。東村山出身。

血液型はB型。両親は彼が小学2年生の頃

に離婚し、それから母一人子一人で仲睦

まじく暮らしていたそうです」

立ち止まり空を見上げる。

雨が降り始める。

ハチオ、濡れながらトボトボ歩く。

近衛（声）「学業優秀で品行方正。周辺の人た

ちに評判を聞いても、彼のことを悪く言う

人は誰もいませんでした。そんな息子を育

てあげた母親もまた立派な女性でした」

○ 喫茶店

近衛「朝から夕方まで働いて、息子と一緒に夕食を食べてまた働きに出る毎日だったそうです。そうして息子を大学に入れることができた。生活環境は何不自由ないもので、きつと家がシングルマザーだからという後ろめたさを息子さんに味合わせたくなかったんでしょう」

ナナミ「そんな親子なのに：殺したんですか？」

近衛「（頷く）：ある日、母親がパート先の工場で事故にありました。頭を強く打ってしまい脳を損傷。遷延性意識障害、つまり植物状態と診断されました」

ナナミ「：」

○ ナナミの部屋

びしょ濡れで帰宅するハチオ。
靴を気持ち悪そうに脱いでいる。

近衛（声）「慎之助くんは延命治療を求めました。大学を退学し、母と同じように朝から夕方まで働き、夕食は母を見舞いながら食べ、夜また働きに出る。そんな毎日が1年半ほど続きました」

ハチオ、リビングに入ってナナミの両親の写真に手を合わす。

近衛（声）「そんなある日、夕食を食べていると、母親の手が動いたのだというんです」
寒気がして震えるハチオ。

○ 回想・病室

寝たきりの母の横でひらがなボードを持ち笑顔で話しかけている慎之助。

近衛（声）「彼は嬉しくて、母とコミュニケーションをとろうとしたそうで：」

慎之助「母さん、どうして欲しい？何か欲しいものある？」

母親の手が動く。
最初の文字は『し』

慎之助「し」

慎之助「な」 次の文字は『な』

慎之助「せ」 次の文字は『せ』

慎之助「て」 次の文字は『て』

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

慎之助「し、な、せ、て……」

○ 喫茶店

近衛「裁判では情状酌量が認められ執行猶予

がつきました。崖にいたということはやはり、

後を追うつもりだったんでしょ？」

ナナミ「何もないって聞いたか？」

近衛「一ノ瀬さん？」

ナナミ「……雨、降ってますね。大丈夫かな？」

近衛「……今の話、聞かなかったことすること

も一ノ瀬さんの自由です」

ナナミ「聞かなかったことになんて……できる

のかな（曖昧に頭を傾げる）」

近衛「一人としては……このまま忘れてしま

っておいたほうがいい。そう思います」

ナナミ「……ですよね」

ナナミ「……遠くから傘をさしナナミの

分の傘を持ったハチオが歩いてきて

いる。

ナナミ「……（哀しみが込み上げ）」

○ 道路

雨の中傘をさし歩くナナミとハチオ。

ナナミ「ありがとうございます。わざわざ」
ハチオ「いえいえ」

二人「（同時に）あの」
ハチオ「あ、どうぞ」

ナナミ「あ、はい。あの：なんで殴ったりなんかしたんですか？あいつのこと」
ハチオ「：なんでだっけ。（笑って）忘れちゃいました」

ナナミ「なんでも忘れたふりする癖ついてますね。記憶喪失で性格悪いなんて目も当てられないですよ」
ハチオ「すいません。ごめんなさい」

ナナミ「謝罪とかいいんで。理由教えてください」
ハチオ「：ナナミさんの話をされて。なんか

悪口みたいなこと言われたので。あと、男女の関係だったみたいなこと言われて：気づいたら殴っちゃってました」
ナナミ「：それって、その、つまり：嫉妬ってやつですか？」

ハチオ「シット：ってなんですか？」
ナナミ「もういいです」

ハチオ「あ、怒ってます？」
ナナミ「（立ち止まり）怒ってます。ハチオさ

ん関係ないじゃないですか？関係ないのに手なんか出して。そういうのが一番嫌いなんです。夏の甲子園で負けたチームのアルプススタンドの女子がめちゃくちゃ泣いてるのあるじゃないですか？いやいや、あんたたち、球児たちが汗水流して練習してる横通り過ぎて毎日帰ってたじゃん。涙流す資格ないよ。関係ないじゃんって。それと同じような気持ちです今。泣く権利は汗水流した人にしかないんです。あいつ殴る資格は、私にしかないんです！」
ハチオ「：すいません。ごめんなさい」

ナナミ「何でもすぐ謝るのやめてください！」

ハチオ「：はい。すいません」

ナナミ「次謝ったら殺します」

ナナミ、足早に歩き始める。

ハチオ「あの！聞きましたか？僕のこと」

ナナミ「（立ち止まり振り返らず）：はい。少しですけど」

ハチオ「僕、どんな人でしたか？」

ナナミ「え、めちゃくちゃ普通でしたよ。めちゃくちゃ普通の、どこにでもいる平均的な一般男性のそれでしたけど」

ハチオ「そうですか。教えてもらっていいですか？」

ナナミ「え、なんでですか？知りたいんですか？あんまり知りたくない感じでしたのに、やっぱり気になる感じですか？ていうか、今更知る必要ありますか？一緒に死ぬんですよね？あ、ジェットコースター乗って崖飛ぶの怖くなった感じですか？大丈夫ですよ、きっとあれより怖くないんで」

ハチオ、ナナミの前まで来て覗き込み目を見つめる。

ナナミ「：なんですか」

ハチオ「ナナミさんが聞いたこと、僕が知らないほうがいいと思うんですね？」

ナナミ「（目を逸らし）：」

ハチオ「だとしたら、教えてください。ナナミさんが聞いたこと、全部」

ナナミ「：あなたの名前は朔田慎之助。23歳。東村山出身で血液型はB型です」

ハチオ「そうですか：じゃあ、僕が崖にいた理由はなんでしたか？」

ナナミ「：知りませんよそんなの！」

ハチオ「ナナミさんが背負う必要ありません！それは僕の荷物です」

ナナミ「：（立ち止まり首を振って）ダメです。相当重いです。ハチオさん細いから、背負えないんじゃないですかね？」

ハチオ「それでも僕の荷物だから。僕が背負うべきです。違いますか？」

後ろ姿のナナミが傘を落とす。

近づき傘を拾い渡そうとするハチオ。

ナナミの顔を見ると泣いている。

ハチオ「泣かないでください」

ナナミ「泣いてないです。これ、雨ですから」

ハチオ「ナナミさんが悲しいと、僕も悲しいです」

ナナミ「別に悲しくないって。泣いてないし」

ハチオ、自分の傘も開いたまま地面に置き、ナナミをぎこちなく抱きしめる。

雨の中、開けた傘が二つと抱き合っている二人。

ナナミ「これ、周りから見たら相当変な二人ですよ」

ハチオ「いいじゃないですか。実際変な二人ですし」

ナナミ「一緒に変にしないでください」

ハチオ「ナナミさんも十分変ですよ。これから死のうって人がミルクティー買います？」

ナナミ「あれは：これから死のうってときは全部の枕詞が人生最後のになるんですよ？人生最後の自販機で買う飲み物でミルクティー選ぶのって、別に人によっては自然なことだと思いますけど」

ハチオ「ああ、本当だ」

ナナミ「何がですか？」

ハチオ「めんどくさいです、ナナミさん」
ナナミ「うっさいです」

抱き合う二人。

雨は降り続く。

○ 日替わり・朔田家前

晴れ渡る空。

一軒家。表札に朔田とある。

スマホを見ながら歩いてくる二人。

ナナミ「あ、ここです。見覚えは？」

ハチオ「（首を振る）立派なお家ですね」

ナナミ「鍵、近衛さんが手配してくれました。

入りますか？」

ハチオ「はい」

ナナミ「：大丈夫そうですか？中に入った途
端に全部思い出して急にサイコパスキ
ーになって襲ってくるようなアメリカン
ホラー的な展開になったら嫌ですよ。やめ
とくなら今ですよ」
ハチオ「ならないと思いますよ（笑う）でも、
万が一そうになったら全力で逃げてくだ
さい」

少し不安げなナナミ、鍵を開ける。

○ 朔田家

玄関から入ってくる二人。

暗い玄関。

ナナミ「（ハチオに）あ、お邪魔します」

ハチオ「あ、どうぞ」

ナナミ、玄関先に男性用のスニーク
ーと、女性用のパンプスがあるのに
気づく。

ハチオ「あ、これ、たぶん母のですね」

ナナミ「ですね」

ハチオ、パンプスを手に取り嗅ぐ。

ナナミ「：何してんすか？」

ハチオ「あ、いや、嗅覚から記憶が目覚める
ことがあるって、なんかで読んだんで」

ナナミ「それって過去に嗅いだことある匂い
で思い出すってことですよね？お母さん

のパンプス嗅いで記憶戻ったら、日常的に
お母さんの足の匂い嗅いでたことになり

ますよ。大変態だったことになりましたよ」

ハチオ「：大丈夫です。何も思い出さなかつ
たんで」

二人、靴を脱いであがる。
各部屋を覗くナナミ。
生活感が残っている各部屋。
ナナミ、ハチオを気にする。
ハチオも各部屋を覗き、さまざま
ものに触れているが何も思い出せな
い様子。

ナナミ、別の部屋を覗くとそこには
ロープで首吊り自殺を試みた名残が

残っている。

ナナミ「あ」

ハチオ「(覗き込み)あ。ナナミさんと同じだ」
ナナミ「ここ、慎之助さんの部屋っぽいです」

青年男性らしい部屋。

ギターを見つけるナナミ。

ナナミ「あ、ギター弾けるみたいですよ」
ハチオ「ホントですね」

ハチオ、部屋を見回し、物に触れる。

ハチオ「なんだか：僕が好きだったものを好きだったことを忘れてしまっているのは、好きだったものに悪い気がしますね」

ナナミ「：なんか、ややこしいです」
ハチオ「(苦笑い)うまく言えません」

× × ×
リビングに入る二人。

食卓の周りはゴミや洗ってない食器がたくさんある。

ハチオ「ああ：なんだかお恥ずかしい」

ナナミ「大変だったんですよ、きつと」

ナナミ「冷蔵庫に手をかける。」

ナナミ「あ、冷蔵庫開けてもいいですか？」

ハチオ「あ、はい。どうぞ」

ナナミ、冷蔵庫を開ける。

食材や調味料がある。

キッチンを見ると料理をしていた名

残が見受けられる。

ナナミ「やっぱり、日常的に料理してたみたいですね。ほら、エキストラバージンオリ

ーブオイルなんて料理好きしか買わな：」

振り返りハチオを見ると、リビング

の端にある母親の簡易祭壇の前に立

っている。

じつと遺骨と遺影を見ているハチオ。

ナナミ「：ハチオさん？」

ハチオ「どうして：」

ナナミ「？」

ハチオ「どうして：なんで：」

ハチオ、膝から崩れ落ちて泣く。

ナナミ、ハチオに駆け寄り寄り添う。

ハチオ「思いいせません！何があったか知っても、どれだけ母に愛されてたのか知っても、住んでた家を見ても、何も思いいせない！思いい出したいのに……辛いことだじゃない！思いい出したいのに……辛いことだじゃない、楽しかったこととか、笑いあったこととか、嬉しかったこととか、美味しかったこととか、そういう思いい出したこと、思いい出したいの……母に……母に申し訳ない」

ナナミ「……」

ハチオの慟哭が響く。

夕日が差し込む部屋で寄り添い互いに支え合う二人。

フェードアウト。

○ ナナミの部屋（朝）

眠っているナナミ。

キッチンで何かを焼いている音。

匂いを感じ嗅ぎながら起きるナナミ。

寝ぼけ眼でキッチンの方を覗くとハチオが料理をしている。

ハチオ「あ、おはようございます」

ナナミ「おはようございます」

ハチオ「顔洗ってきてください。もうすぐできるんで」

× × ×

洗面台で顔を洗うナナミ。

歯ブラシに歯磨き粉を出すときに少し考えて、無駄に大量に歯磨き粉を使用し磨き始める。

× × ×

机に並べられる焼き鮭や納豆味噌汁などの朝食。

ナナミ「うわぁ」

ハチオ「ナナミさんが言ったの、一応全部揃えてみました」

ナナミ「すごいです！これぞ日本人の朝ごはんって感じです！いただきます」

ハチオ「いただきます」

食べ始める二人。

ナナミ、ハチオを気にしている。
 ハチオは黙々と食事をしている。
 ナナミ「：あの」
 ハチオ「はい？」
 ナナミ「ご飯粒、口の横につけるように食べ
 てもらっているんですか？」
 ハチオ「え、どうしてですか？」
 ナナミ「いいから。お願いします」
 ハチオ「はあ：」
 ハチオ、ご飯を食べて口の横にご飯
 粒をつける。
 ナナミ「あ、ハチオさん。ご飯粒ついてる」
 ハチオ「ええ、そりゃあ：」
 ナナミ、ハチオについてるご飯粒を
 取り、食べる。
 何事もなかったかのように食事を続
 けるナナミ。
 ハチオ「（訝しげに）なんですか、今の」
 ナナミ「：一度してみたかったです。これ
 以上聞かないください」
 ハチオ「じゃあ、僕もしたいんで、ご飯粒つ
 けてください」
 ナナミ「え、絶対やです」
 ハチオ「え、自分だけずるじゃないですか」
 ナナミ「：なんでしてみたいんですか？」
 ハチオ「だって、ナナミさんがしたっていう
 ことは、なんか良いことなんですよね？ 僕
 も経験したいんで」
 ナナミ「：絶対やです！」
 × × ×
 鏡の前で服をあてがっているナナミ。
 着替え終わっているハチオは机でコ
 ーヒーを飲んでいる。
 ナナミ「ハチオさん。こっちの赤い服にジ
 ンズを合わす感じがいいですか？ それと
 もこっちの青いワンピースがいいです
 か？」
 ハチオ「えっと：どっちでもいいと思います」
 ナナミ「（不服そうな顔）ハチオさんってモテ
 なかったでしょうね」

ハチオ「あ、いや、どっちでもいいって
のは、その、どっちも良いつてことだ」
ナナミ「言い訳結構です」
ハチオ「あ、いやあ：青いワンピース、素敵
だと思えます」
ナナミ「：そうですか。じゃあこれにします」
「なんだか照れあう二人。」

○ 道

「気持ちの良い天気の中を歩いている
二人。」

ハチオ「いい天気ですねえ」
ナナミ「そうですね」

間

ナナミ「え？ だけですか？」

ハチオ「はい？」

ナナミ「いや、天気がいいですねってだけ
ですか？ 話すこと」

ハチオ「：ですね」

ナナミ「それは無責任です。広がりもしない
天気の話をし出す人は、それ以降の会話を
展開する責任があるんです。ハチオさんは
責任放棄人間です」

ハチオ「じゃあ：ナナミさんは天気の中だと
どの天気が好きですか？」

ナナミ「なんですかその質問。え、これ晴れ
以外に選択肢あるんですか？ 雨とか曇り
とか答えるのって捻ったこと言いたい人
か、ブログにポエム書くような人くらいで
すよ」

ハチオ「雪とかは好きな人もいそうじゃな
いですか？」

ナナミ「ああ。雪は好きです」

「微笑ましく歩く二人」

ナナミ「あ、ちよっと寄りたいとあります」
ハチオ「そうですか」

○ パン屋

「パンを選んでいる二人。
ハチオ、メロンパンをナナミのトレ

「に乗せる。」
ナナミ「メロンパンですか」
ハチオ「メロン食べたいなあって」
ナナミ「メロンパンってメロンが入ってるわけじゃないですよ？」
ハチオ「え、そうなんですか？」
ナナミ「でも美味しいですよ」
ハチオ「メロン：」
ナナミ「じゃあ買ってくるんで、先に出とい
てください」
ハチオ「はい：メロン：」
ハチオ、店の外に出る。
ナナミ、レジに来て呼び鈴を鳴らす。
奥から制服を着た由衣がやってくる。
由衣「はい、お待たせしました：あ、ナナミ！
来てくれたの」
ナナミ「うん」
由衣「嬉しい。ありがと。ここのパン全部美味
しいんだよ」
ナナミ「どれも美味しそうで悩んじゃった」
由衣、店の外でナナミを覗き見てい
るハチオを見つける。
由衣「あれ、あの外にいる人ってもしかして、
いい人？」
ナナミ「：まあね」
由衣「あらあ、いいねいいね！お熱いねえ」
ナナミ「このあとはケータイショップ？」
由衣「うん。娘のために頑張って稼がなきゃ。
メロンパンとミックスサンドで550円
です」
ナナミ、小銭で支払う。
由衣「600円のお預かりなんで50円のお
返しです」
由衣が差し出した釣り銭の手を握る
ナナミ。
由衣「え？どした？」
ナナミ「：ありがと、由衣ちゃん。私のこと、
覚えててくれて。忘れないでいてくれて」
由衣「うん：どういたしまして」
ナナミ、パンを受け取り歩いていく。

由衣「ナナミ！」
由衣、何かを勘づく。

由衣「今度さ、うちの娘紹介させてよ。あんな話したら会いたがっちゃってさ。また甘いもんでも食べに行こうよ。あ、その彼氏さんも一緒に、四人で。ね？」

ナナミ、振り返り小さく手を振る。
由衣もつられて小さく手を振る。

店を出るナナミ。

ナナミ「（ハチオに）お待たせしてごめんなさい。行きましようか」

ハチオ「ナナミさん？」

ナナミ「なんですか？」

ハチオ、ポケットからハンカチを出しナナミに渡す。

涙を流しているナナミ。

ナナミ「（受け取り）ハチオさん、ハンカチすぐ差し出せるなんて、モテますね」

ハチオ「恐縮です」

○ 駅のホーム

ナナミ「ベンチに座りパンを食べている二人。ですか」

ハチオ「はい。美味しいです。なんかメロンの味がする気がします」

ナナミ「分かります。メロン関係無いと分かっても、名前と見た目で味までメロンな感じしますよね。人間の脳って不思議です」

ハチオ「あ：えーっと（頭を抱えだす）」

ナナミ「え、大丈夫ですか？」

ハチオ「え、なんか思い出せそうで」

ナナミ「え、今？マジですか？」

ハチオ「えーと：ああ！そうだ！プリンに醤油でウニの味するっのも、言われすぎて

てそんな気がするだけな気がしますよね」

ナナミ「：そんなこと思い出したんですか？」

ハチオ「はい。なんか似たようなことあったなあって思ってた」

ナナミ「：人間の脳って不思議ですね」
ハチオ「ですねえ」
パンを食べる二人。

○ 駅前・バス停

ナナミ「バス停のベンチに座っている二人。
共の場で足組む人」
ハチオ「あー確かに。じゃあ：たった5分で
できる簡単料理って言っというて前からの
仕込みが必要なレシピ」
ナナミ「あ、分かります。嫌ですよ。じゃあ：エレベーターのボタン前に立ってる
のに閉めるボタン押さない人」
ハチオ「はいはい。そしたら：えっと：あ、
ジェットコースター」
ナナミ「ジェットコースターは楽しいのでダメです」
ハチオ「えーそれは人それぞれじゃないですか」
ナナミ「ダメです（笑う）。あーあ、あんなこと
とがなきゃ観覧車も乗れたかったですね」
ハチオ「観覧車って、あの大きい丸いやつです
か」
ナナミ「そうです」
ハチオ「あんなの乗りたいですか？怖いじゃない
ですか」
ナナミ「：もしかして、ハチオさんって高所
恐怖症？」
ハチオ「え？そうなんですかね」
ナナミ「あーなるほど。だから崖で：過度な
ストレスによる気絶とか記憶喪失はある
ってなんかで読んだんですけど、それプラ
ス高所恐怖症だったんですね」
ハチオ「はあ：なんか緊張してきました」
ナナミ、ハチオの背中を強く叩く。
ハチオ「痛！」
ナナミ「へへへ」

○ バス車内

前方にお婆さんが座っているだけの空いている車内。バスの後部座席に並んで座っている二人。

ハチオ「え、もっと豪遊とかしめようよ。3 億円当たったらって話ですよ？」

ナナミ「でも、そんなに欲しいものもないです。せいぜい塩タンを上塩タンにしたり、ちよつとした距離でもタクシー乗ったり、ボールペン買うときにどうせあんまり使わないのに 4 色のやつ買ったりするくらいですよ」

ハチオ「ナナミさん、つまらないです」

ナナミ「じゃあ、ハチオさんはどう使います、三億円」

ハチオ「そうですね：宇宙旅行とかですかね」

ナナミ「それ 3 億じゃ無理じゃないですかね」

ハチオ「え、宇宙旅行ってそんなに高いんですか」

ナナミ「たぶん足りません。知りませんが。てゆうか高所恐怖症なのに宇宙旅行って」

ハチオ「そこまでいくと大丈夫かって」

ナナミ「でも、そこまでいくまでの過程は怖いですよ。ジェットコースターなんて比じゃないですよ」

ハチオ「あー：じゃあ、定食の味噌汁を豚汁に変更するくらいにします」

○ バス停

止まっていたバスが走り出す。二人がバスを見送っている。

○ 寂れた商店街

人気のない通りを歩く二人。唯一営業している食堂の前で立ち止まるナナミ。

ナナミ「なんか食べていきます？」

ハチオ「そうですね」

○ 食堂『海坊主』

テーブルで松浦と島村が食事をして
いる。
隣のテーブルに作造と八重子が座っ
ている。
作造「（ノートを見て）こりゃあ今シーズン
ラーメンに決まりって感じだねえ」
松浦「海鮮丼が終盤にペース落としたもんね
え。くそお」
島村「（ノートを覗き）お前ら、またそんな不
謹慎なことやとるんか」
八重子「先生も一口乗るかい？」
島村「こんなんでも一応医者 endpoint くれた。馬
鹿にするな」
店にナナミとハチオが入ってくる。
八重子「いらっしやい…あらあ、あんたらあ」
島村「あ、あんときの」
ナナミとハチオ、軽く会釈をする。
× × ×
ナナミとハチオのテーブルに海鮮丼
が置かれる。
八重子「はい、海鮮丼二つね」
作造がこっそり記入するノートを覗
く松浦。
松浦「ありがとうございます！」
ナナミとハチオ、きよとした顔。
松浦「あ、こっちの話です。すいません」
作造「あんたら、あれからどうしてた」
ナナミ「まあ、なんとなく、生きてみました」
島村「でも、またここに来た」
ナナミ「はい：でも今回はちゃんと、胸張っ
て、堂々と来たんで」
島村「：そうかい」
八重子「医者の端くれなら止めるのが筋なん
じゃないのかい？」
島村「神様でもないんだからそんな傲慢なこ
たあしないよ。一度死ぬ気になって、いつ
ぺん立ち止まって生き直して見て、また
死ぬ気になったんなら、それはもう真っ当
なこいつらの寿命だよ」
作造と松浦がコソコソ話している。

黙々と海鮮丼を食べているハチオ。
八重子「あんたは？思い出せたの？」
ハチオ「へ？ああ、いやあ、なんにも。自分のこと色々と知れたは知れたんですけど、思い出せてはないです（海鮮丼を食べる）」
八重子「呆れたねえ。それなのにあんた死ぬの？」
ハチオ「（咀嚼しながら）そうですね。きっと僕は死にたいんです。それも忘れちゃってますけど」
八重子と島村が吹き出して笑う。
島村「あんたら、変わってんな。死ぬ死ぬ」
八重子「冥土の土産にプリンサービスするよ」
ナナミとハチオもつられて笑う。
松浦「（ナナミに）あのお……」
ナナミ「？」
松浦「こないだあんた来たとき、海鮮丼食べたっけ？」
ナナミ「いや、食べてないと思いますけど」
松浦「やっぱり！？作造さん、海鮮丼食べてないって！」
作造「あんた、確かラーメン食ってたよな？」
ナナミ「はい」
八重子「なんだいあんたたち」
松浦「いや、こないだのこの人の食べたのも数に入れちゃってたけど、よく考えたらあんなときは死ななかったわけだからノーカウントになるでしょ？で、今日の海鮮丼2はカウントされるということとは……」
作造「（ノートに書き）海鮮丼が単独首位だ！」
松浦「やったー！」
ハチオ「なんですかそれ？」
作造「おう、これ見てみろ」
ノートを囲む作造と松浦と八重子とハチオ。
ナナミ「不謹慎な遊びですね」
島村「不謹慎なあ：生きるも死ぬも、他人から見たら遊びみたいなものじゃないことだ。生き死になんて、そんなに思い詰めることじゃねえのかもしれない」

ナナミ「：確かに。そうですね。なんだか分かるような気がします」
賑やかに盛り上がっている店内。

○ 崖

風が吹き荒ぶ道を断崖絶壁に向け歩く二人。

ハチオ「楽しかったですね」

ナナミ「そうですね」

ハチオ「お腹いっぱいです。なんだか眠たくなってきました」

ナナミ「いよいよってときですよ？緊張感無さすぎ」

ナナミが以前立っていた断崖絶壁に到着する二人。

ナナミ「：戻ってきました」

ハチオ「そうですね：」

ナナミ、スマホを取り出し見る。

通知に由衣からの着信とラインでの『心配だから時間あるときに連絡しようだい』とある。

ナナミ「：」

ナナミ、返信に『ごめんね。ありがとう』と入力し、送信せずに電源を切りスマホをポケットにしまう。
海を眺める二人。
お互いに視線を水平線に向けて話し始める。

ナナミ「ハチオさん」

ハチオ「はい」

ナナミ「私のやり残したこと、付き合ってもらってありがとうございます」

ハチオ「いえ、楽しかったです」

ナナミ「でも、まだまだやり残したことだらけでした。ここ来るまでにどんな思いつい

いちやって」

ハチオ「なんですか？」

ナナミ「北極でオーロラが見てみたかったです。ガシャポンを空になるまで回してみたかったです。ドレスコードとかあるレスト

ランでフルコース食べてみたかったです。
走るの嫌いだけどフル馬拉ソンに挑戦し
てみたかったです。結局出せなかったから
やっぱりカラオケで100点出してみた
かったです。串が刺さって出てくる顔くら
い大きいハンバーガーを食べてみたかつ
たです」

ハチオ「全部楽しそうです」

ナナミ「でも、死にます」

ハチオ「はい」

ナナミ「ハチオさんは、やり残したことあり
ますか？」

ハチオ「そうですね：（ナナミを見て）ナナ
ミさんに、幸せになってほしかったです」

ナナミ「（海を見たまま）：なんすか、それ」
ハチオ「ナナミさんが、幸せだいいなって

いつも思っていました。あ、今も思っています」
ナナミ「（涙が溢れて）：それだったら、大丈

夫です。ハチオさんといたときは、だいた
い幸せでした、私」

ハチオ「そうですか。それは：それは、良か
ったです。生きててよかった」

ナナミ「：飛びますか」

ハチオ「はい」

一歩前へ出る二人。
足元を見るナナミ。

深い崖に打ち付ける波。

改めて前を向き直す。

太陽が沈もうとしている夕焼け。

ナナミ「：綺麗」

強い風が吹く。

思わず目を閉じるナナミ。

足を挫き崖から落ちそうになる。

その腕を掴み引っ張り上げるハチオ。
抱きしめる格好になる。

ナナミ「：」

ハチオ「：」

波が打ち寄せる音だけが聞こえる。

ナナミ「：また、どさくさに紛れて」

ハチオ「すいません。ごめんなさい」

ナナミ「あ、謝った。殺します」

ハチオ、腕を解く。

二人、さっきと同じく並んで立つ。

夕日を見つめる二人。

ハチオ「：本当に、綺麗ですねえ」

ハチオ、何かに気づき自分の手を見る。

ナナミに握られた手。

ナナミを見る。

ナナミ「（夕日を見つめたまま）：やっぱり：
ちよつと、生きましようか」

ハチオ「：（微笑み）はい」

ナナミ「あ、ほんとに：ちよつとだけ：です
けどね」

ハチオ「（頷き）はい」

手を握り合った二人が水平線に落ちていく夕日を眺めている。

ハチオ「（ナナミを見て）あ、海鮮丼」

ナナミ「（ハチオを見て）あ」

おしまい

【参考文献】
なし